

2014年 予想とポイント

大阪医科大学

【化学】

	2013年	2012年	2011年
I 番	凝固点降下	反応速度と 平衡定数	同位体
II 番	無機(ハロゲン)	有機(脂肪族)	酸(酸性雨)
III 番	有機(メタノール)	無機(ハロゲン)	コロイド溶液
IV 番	生活(ポリマー)	糖	有機(脂肪族)

大阪医大の化学は半分が有機である。そのうち1問は化学I内容であり、脂肪族の構造決定が出題されやすい。もう1問はアミノ酸あるいは油脂が要注意であろう。また生活と物質、特にポリエステルやポリアミドなどは見直しておく方が良さそう。残り2問は理論と無機であり、今年度は気体、溶解度(溶解度積を含む)、立法格子、無機は金属の性質が要注意単位であると思われる。

【生物】

大阪医大の生物は、伝統的に穴埋め・計算・実験考察の3点が特徴的である。

穴埋めは基本的な生物用語を問うもので、教科書レベルを超えていることはほとんどない。文章の内容としても平明で簡潔なものが多く、ケアレスミスなども起こりにくい形になっているので、失点は避けたい。

計算は、これまでは非定型的な、何をどうしたらよいのか見抜きにくいタイプもよく出題されてきた。解答に迷ったら、何らかの比例式を立てる方向に考えていくと、切り口が見つかることがある。

実験問題は、よく取り上げられるテーマにおける標準問題が多い。「～を述べよ」という論述式設問の出来がポイント。センター試験の正解の選択肢に書かれてあるぐらいの内容や量が論述の目安となるので、事前にセンターの問題を眺め、イメージトレーニングしておくことをオススメする。

今年は計算問題としては浸透圧、細胞周期、呼吸、ハーディ・ワインベルグの法則、分子進化が狙い目。分野的には、植物や生態系を含めて何でも出題されるので、テーマや内容を予想するよりは教科書などで苦手な箇所の補完に努めたほうが良い。時間配分にも気を配った、悔いのない戦いを期待している。

【英語】

下記の表を見て何らかの規則性に気がつくだろうか？通常、参考書や赤本等の年度は1年数字を更新追加された数字となる。2013年に実施された入試は2014年度版用となる。簡単に言ってしまうと受験した年度の1年前の3月から6月のTimeかNew York Timesを事前にチェックしておれば難関医大と言われる大阪医大の長文の半分以上がストーリーが全て読めてしまい、記憶力の良い生徒ならすぐに書けるという可能性のシナリオが出来るということにもなるだろうと思う。

つまり、その記事のストーリーが事前に記憶されていれば「ゼロ」から苦勞して英文を読みこむ作業が不要になるということになる。特にMARCH（3月）とMAY（5月）が2回も出題されている。残りも4月と6月という点を考慮すれば年の前半だけに絞り込んでもかなりの中するということになる。おそらくこういう点はほとんどの受験生が気がつかない盲点と言えるだろう。しかし、気がついている受験生も確実に存在するだろうと思う。

普段から趣味として読んでいる生徒なら容易に長文内容は想像できるだろう。

【英語】

年度	2014	2013	2012	2011
前期	① Time march 12 2012 実施年度は <2013>	② Time june 6 2011 実施年度は <2012>	③ NewYork Times may 24 2010 実施年度は <2011>	① Time april 6 2009 実施年度は <2010>
後期	① NewYork Times may 31 2012 実施年は <2013>			
英作	3題	3題	前期2題 後期3題	3題
年度	2010	2009		
前期		① Time march 26 2007 実施年度は <2008>		
後期				
英作	3題	3題		